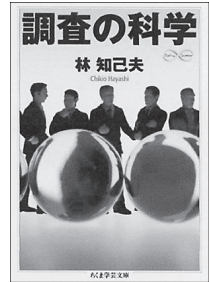


●林知己夫 著

（筑摩書房，2011年，文庫版，212頁，1,050円）

●米田 正人

（国立国語研究所名誉所員）



本書は、1984年に講談社からブルーバックスシリーズの1冊として出版され、その後絶版となっていた『調査の科学——社会調査の考え方と方法』が「ちくま学芸文庫」として2011年に再刊されたものである。

全編を通して複雑な数式をほとんど使わず、平易な文章でわかりやすく書かれた書物であるが、単なる入門レベルの記述ではなく、統計数理の核心に触れる示唆に富んだ記述が随所に見られる内容となっている。

著者である林知己夫先生は、第二次大戦のさなかに大学を卒業、陸軍航空本部にて特攻機の攻撃方法に関するデータ解析に従事されたそうである。そのときの経験から生まれた、「調査という道具で社会を見たり、考えたりする」というご自身の調査に対する実践哲学を「序章 社会調査の心」で披露し、本論への導入としている。以下、章立てに従って内容を見ることにする。

「第1章 社会調査の論理」では、社会調査を実際に企画する場合、“外的基準がある”場合と“外的基準がない”場合の2つの立場を認識する必要があること、社会調査は因果関係を明らかにするものではなく、問題発見の論理、現象探索の論理に立ったものであること、という基本的立場を説明し、数理統計学で行われる仮説—検定の限界について述べ、次章以降へ結びつけている（冒頭から専門用語の羅列になってしまったが、本書ではこれらの用語を丁寧に説明している）。

「第2章 調査の基本——標本調査の考え方」では、調査対象としてのユニバース、母集団、標本といった概念、標本抽出調査、母集団推定の精度・推定の方法等を具体的な数値を交えてわかりやすく解説している。

「第3章 質問の仕方の科学」では、国民性調査、1956年日ソ交渉における北方領土問題に関

する世論調査、憲法改正をめぐる世論調査等々を例に、調査の仕方や調査の限界などを詳説し、「第4章 調査実施の科学」では、実査にかかわる調査員による誤差、回収率低下にかかわる誤差をはじめとした「非標本抽出誤差」について言及している。

「第5章 データ分析のロジック」では、非標本誤差を無視した統計的検定に対する警鐘を鳴らし、部分集団別（属性別）分析の重要性、クロス集計の注意点、多次元的分析の必要性へと話は進む。さらに、パターン分類の数量化（質的データの数量化）の仕組みを懇切丁寧に解説している。章後半では継続調査、さらには国際比較調査の重要性へと話は展開する。

「第6章 調査結果をどう使うか」では、社会調査の応用としての市場調査、視聴率調査、選挙予測等に関する考え方が述べられ、以下のように本編が締めくくられている。「社会調査の結果は他の方法では知り得ない世の中のある重要な局面を示す一つの重要な指標である。調査の性格をわきまえてそれを正しく使うことが、社会調査の倫理でもあり論理なのである。」

ブルーバックス版にはなかったものであるが、巻末には吉野諒三先生（統計数理研究所データ科学研究系教授・調査科学研究センター長）による再刊に寄せた解説が、「解説 データの科学の真髄」として掲載されている。林先生が歩んでこられた時代背景や本編の補足が述べられていて、本編の理解がさらに進むよう配慮されている。

以上で見てきたように、「社会調査」をわかりやすく解説した書物なので、調査に携わっている実務者、研究者、またこれから調査の世界に足を踏み入れようとしている学生、さらには行政に携わっている人、医療関係の人等々、幅広い方々に是非読んでもらいたい1冊である。

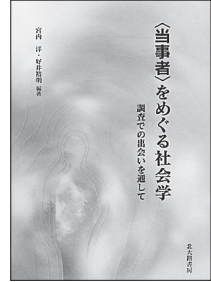
『〈当事者〉をめぐる社会学
——調査での出会いを通して』

●宮内洋・好井裕明 編

(北大路書房, 2010年, A5判, 232頁, 2,940円)

●野口裕二

(東京学芸大学教育学部教授)



本書は、近年注目を集めている「当事者」および「当事者性」に関して、10人の社会学者がそれぞれのフィールド経験をふまえて論じたものである。取り上げられるテーマは、性風俗、性同一性障害、環境運動、農村、移民、障害者家族、認知症、マスメディア、被差別部落など多岐にわたるが、それぞれの経験に基づく考察がたいへん印象的であり、かつ、読み応えがあった。いわゆる論文調ではなく、研究者としての自らの経験を振り返る「自分史」のような書き方をしている章も多く、それが通常の論文集とは異なるズシリとした重みを与えている。編者が執筆者に対してどのように依頼したのかはわからないが、この「自分史」的な文体が、まさに、「研究者としての当事者性」を伝えるという意味で重要な効果を発揮している。

一方、本書を読み終えて、「当事者」および「当事者性」に関して、何か明快な1つの見通しが得られたかという残念ながら否と答えざるをえない。それぞれの章でそれぞれ重要な指摘を突き付けられ、考えなくてはならない論点が数多くあることはわかったが、その全体的な見取り図のようなものは得られなかった。最後に、編者による論点整理がなされていれば、それがもうすこし明確になったのではないかと思う。

それにしても、なぜ、いま、「当事者」なのか。この問題に関して、編者の宮内は、「日本の高等教育の大衆化」によって当事者自身が自らのことを研究できるようになったことを理由の1つにあげている。評者もこのことについてはまったく異論はないが、同時に、これに伴って、研究者によるいわゆる「客観的研究」の地位が低下していったことを付け加える必要があると思う。たとえば、統合失調症の患者が自らの生きる世界について詳細かつ雄弁に語り始める。そのとき、研究者がこ

れまで外部から観察して「発見」し「定式化」してきた「専門的知見」は確実に相対化されていく。それはかならずしも「否定」されるわけではないのだが、かつてのような権威と信憑性を保てなくなる。こうして、研究者は当事者の声を一方的に切り取ることができなくなり、それを取り入れながら自らの専門的言説を再構成せざるをえなくなる。いま生じているのはそういう変化なのではないだろうか。

だとすれば、当事者性を論じることは、研究者性を論じることと同じである。宮内はこのことに関連して、当事者の物語に対する研究者の物語の「圧倒的優位性」という指摘をしているが、評者からみると、かつては存在した研究者の「圧倒的優位性」がいま崩れつつあることのほうが重要に思える。社会学は昔からさまざまな「当事者」と向き合い調査をしてきた。しかし、かつては、「当事者」という言葉は使われなかった。当事者は調査対象者とほぼ同義だったからである。しかし、現在は、そのような考え方が通用しなくなり、「当事者性」という問題が無視できなくなっている。当事者性への関心の高まりは、研究者性のゆらぎとその再構築という課題をわれわれにつきつけているのではないだろうか。

では、これからの社会学および社会調査は「当事者」とどう向き合っていけばよいのか。問うべき問いはやはりここに戻ってくる。この問いに答えるうえで乗り越えなければならない数々の論点を示したことに本書の重要な意義がある。

